

# こども 教育 文化

第8号

もくじ

読む力をどのように育てるか 「手ぶくろを買いに」の授業を通して	村井 由美 : 1
平和をもとめるほくのねがい 熊谷健治 金森敬子 畠山巖ほか	: 7
アキラとケン ―巨視的にみる― 高城の教育遺産 <sup>8</sup>	門真 隆 : 13
北方綴方の道程 ―ちいさな鈴木道太論―	菊地 新 : 16
妹よ	笹原 京子 : 20

## 読む力をどのように育てるか

「手ぶくろを買いに」の授業を通して

村井 由美

### 1 読む力を育てるために

心がけてきたこと

#### ◆ 学校や勉強が好きな子に

「学習内容が積み重なっていない子ども」「話に集中できない子ども」「家庭的な問題を抱えている子ども」「授業妨害をする子ども」など、子ども達は様々な課題を抱えている中でも健気に学校に来ている。学級の中で、学習や生徒指導・特別支援・家庭などで問題を抱えている子ども達を、せめて、学校に来ただけは安心して楽しく過ごさせてやりたいと思っている。「勉強」や「友達」との関わりを

通して「学校は楽しい」「勉強が楽しい」「先生や友達が好き」と思えるような学級作りを目標にしている。

#### ◆ どこかで満足させる

どの教科でもよいが、自分に対して「私ってすごい」「俺、こんなことできるようになった」思えること、友達からは「○○さん、すごい」と思われるような授業や関わりを作ること、自己成就感をもてるようにする。

#### ◆ わたしの国語の授業で大事にしていること

1 書かれていることを一問一答することから始める。

誰でも答えられるように、4月は文に書いてあることをそのまま言わせることから始める。勉強が苦手な子も、このときだけは手を挙げられる。その時は、すかさずほめる。明らかに課題があるが発表する時は、「いつもくくな○○さん、自分から手を挙げて。頑張ってるよ」と、その頑張りをみんなで褒め称える。長くしゃべった場合は、その子の所へいって、頭をなでながら「すごい。長く話せたね」「内容は同じだけど、言い方が違う」「すごいね。自分の言葉で言ってる」等と褒める。同じことも、どんどん言わせることで、手を挙げることに慣れさせる。また、自分の声を学級の人々に聞いてもらうこと、自分の考えを言うことで自分を理解してもらう。

2 文の基本は主語・述語で成り立っていること（1つのことを表す練習）。文が集まって、よりくわしく言いたいことを伝えていること。段落が集まって、作者は自分の考えを伝えていることを説明文で確認しながら指導する。

名詞、動詞、形容詞や副詞などについてそれぞれ指導する。重要語句は短文作りを通して、使い方を身に付ける。

接続詞の意味と使い方を短文作りを通して指導する。

文末表現や副詞など、作品によって文の特徴がはっきりしていることについては、言葉の

つ役目を教え、授業での読み取りに生かす。

3 「言葉の力」を意識し、定着させるようにした。  
(その都度まとめて掲示し、いつでも確認できるようにした。)

単語や文を比較することで、言葉に対する感性を育て、認識力を付ける。

「もしくだったら」と仮定して考える見方を教えることで、ものごとを深く捉えたり、対象を理解したりする力を育てる。

4 書かれていることを「絵と感情」にする。文字で書かれていることを頭の中に映像化(イメージ)させる。実際に絵に描ける場合は、読み取ったことを黒板に絵を描きながら進める。

5 意味調べは、常に国語辞典を使う。調べた語のページには付箋を貼る。意味は教科書にそのまま書かせることで、授業中意味を確認するときの時間のロスを省いた。

6 拡大コピーを使って全文板書を行うことで、文に集中するようにした。

場面をつなげて考えることで、深く読み取る力を付ける。

7 読書を勧める。(読み聞かせ・学級文庫) 言葉を知らないと考えられないので、懇談会やおたよりでは家庭に読書の啓蒙を行った。

8 文で答える。単語で答えない。どの教科でも、常に文で答えるようにさせた。同じ意見も自分の言葉で言う。

9 話すこと・聞くことを重視する。磁石に名前

を書いておき、発表したら裏返す。発表していない子に当てて、1時間(1日)のちに全員発表させる。「文にはくくと書いているので、くすです」という話形を教えて話させる。全員発表したら、カードに書いて、学級の宝として貼っておく。後にお祝い会へつなげる。

10 みんなで勉強しているという意識を持たせる。子ども同士をつなげる。

友達の考えに対する感想を言わせる。いろいろな授業では、誰かが発表したら、「〇〇さんの意見、どう思う。」「今の意見について、あなたの考えを発表して下さい。」などと、出来事や友達の意見を聞いてどう思うか、自分の考えもち、話す訓練をさせた。

## 2 「手ぶくろを買いに」の授業記録

手ぶくろを買いに 新美南吉・作 (17時間)

1 授業で心がけていたこと

視点1 「書かれていることを絵と感情にする」

視点2 「場面をつなげて考える」

視点3 「子ども同士をつないだ学習集団を作る」

2 仮説 日々の授業における上記の指導と3つの視点をもった授業を行えば、子ども達に読む力を育てることができるのではないかと

初めて外に出た子ぎつね 雪景色の美しさと、初めて雪と遊ぶ経験を通して、様々なことを学んでいる子ぎつねをイメージする。

⑨ 子どものきつねは遊びに行きました。⑩ 真わたのようにやわらかい雪の上をかけ回ると、雪の粉が、しぶきのようにとびちって、小さいじがすつとつるのでした。  
⑪ するととつぜん、後ろで、ドタドタ、ザーッと、ものすごい音がして、パン粉のような粉雪が、ふわあつと子ぎつねにおっかぶさつてきました。⑫ 子ぎつねはびっくりして、雪の中に転がるようにして十メートルも向こうへにげました。⑬ 何だろうと思つてふり返つてみましたが、何もいませんでした。⑭ それはもみのえだから雪がなたれおちたのでした。⑮ まだえだとえだの間から、白いきぬ糸のように雪がこぼれていました。

T 雪の上を歩くのは、

初めて。

・ うきうきしながら、走つていったと思う。

・ ぼくも、うきうきして、スキップとかしながら。

・ スキップしたり、ジャンプしたり。

・ 雪が初めてだから、まちきれないほどうきうきしていった。

T 【書かれていることを絵と感情にする】みんな、どの言葉で想像できましたか。

・ 真綿のように柔らかい雪をかけまわった、の駆け回つたと書いているから、走りながらかけ回つていると思う。

・ かけ回るだから、雪の上を子ぎつねが回るように遊んでる。

・ ほかも2人と同じようにかけ回ると思いますが。かけ回るとはね、子ぎつねが走って回ると思ったから。雪を知らなかったから、どういう物なんだろう。何だろうと思つて、走り回つた。

T その雪は、何て書いてある。

・ 真綿のように柔らかい

T 触つた感じ、柔らかい。重さは、

・ 軽い。

T その上を子ぎつねが遊んでいるんだよ。教えて下さい。

・ 元気に。

・ 子ぎつねは初めてだから、足跡付いていないところまで、いっぱい駆け回つて遊んでる。

・ 駆け回るといふのは、うちのネコと同じで、遊んでいるときもいっぱい走り回つて、走りながら遊んでいる。

・ 洞穴の近くだけでなく、足跡のないところまで離れた。

・ すべつてみたり、木を揺らしたり、

・ なんか、とびこんで、雪に埋もれたり、

・ 雪の中にジャンプしたり、

・ 雪を知らなかった子ぎつねは、分かんないから、雪を食べてみたり、

T どんなこと言いながら遊んでいると思う。

・ 目に何か刺さつてと思つて、怖かつたけど、こわくないや。

・ 雪を知らなかったから、雪遊びつてこんなに楽しい。

・ 雪つて、足跡を付けながら、ゆきだらけになつて、わあいつて、

・ 雪を持って、わあいつて、

・ 雪に埋もれたときにわあいつて。

T どんな気持ちかな。

・ 最高

・ 初めて見たから、すごくうれい。

T そうやって遊んでいるときに、子ぎつねが見た物は何ですか。

・ 自信ないけど、「雪の上を駆け回ると、く〜のでした」って書いてあるから、小さい虹が見えた。

・ 「雪の粉がしぶきのように飛び散つて」だから、プールに入ったとき、水掛けて遊んでたら虹が出るでしょ。そうなつたみたいなのに、小さい虹が見えた。

・ シャワーの時、虹が見えたのと同じで、雪の粉だから、細かいから、「太陽がまぶしいど反射して」って書いていたから、その雪に太陽の光が当たつて虹が出たのが見えた。

T 何色

・ 赤、紫、黄色、青、水色、緑……。

T 夢中で遊んでいるときに見えたんだね。夢中で遊んでいるとき、何が起きたのですか。

・ 「するととつぜん、、きました」って書いてあるから、突然は、急になつていうことだから遊んでたら急に、後ろで、「下タドタザーツ」とものすごい音がして」は、ものすごく大きい音がしてだから、パン粉のような粉雪がふわあつとおつかぶさつてきたと思います。

T 子ぎつねのこともつなげて言つてごらん。

・ 夢中で遊んでいるから、急に、木から雪落ちるって思わないのに、急に雪落ちてきたから、初めてだから、すご〜いびっくりして、十メートルもあつち

に逃げていった。

・ 遊んでいたら、いきなり、すご〜い音がして、そこから雪が落ちてきて、飛び跳ねるくらい、びっくりした。

T ⑩ちよつと長いから確認するよ。突然何が起きたかというと、

・ ものすごい音がした。

T 最初に音がした。その次に何が起きたの。

・ 「突然後ろでく〜きました」って書いてあるから、ものすごい音がした後に、パン粉のように軽い粉雪が子ぎつねの上にかぶさつた。

・ 先生、想像したんだけど、先生が描いている木の大きい枝に、雪がいっぱい積もつているところから、ざざーって、子ぎつねにおつかぶさつてきた。雪崩のように。

・ 落ちて、おつかぶさつた。

T それで、子ぎつねはどうしましたか。その次にどうなつたのですか、子ぎつねは。

・ だから、びっくりして、10メートルも逃げたと思

います。

・ 「子ぎつねは、びっくりして、…にげました」と書いてあるから、雪は子ぎつねにおつかぶさつたから、びっくりして、10メートルも向こうへ逃げたと思

ます。

T 10メートルつて、どれくらい分かる。さつき測つたら、ここから、あの位までだよ。

・ ええつ。

T それくらい逃げたつて事は、

・ 怖かつた。

・ 目が回るくらい怖かつた。

・ 心臓が飛び出すくらい怖い。

・ 子ぎつねは怖かつたけど、今逃げないと思つて感

びっくりして、後ろも見ないで逃げた。

・ ぴゅーんてスピード速く逃げた。

・ 子ぎつねはそれが雪つて知らないでしょ、まだ小さいから、お化けかと思つて、追いついてこない

ように10メートルも逃げた。

・ おおかみとかいたら食べられるから、すごく速く。

T 10メートルもつて書いてあるよね。もつていうの

はね、すごくっていう意味があるんです。その時の逃げる様子は、何て書いてある。

・転がるようにして。

・転がるようにしてだから、ようにだから、本当に転がったんじゃないくて、転がると似た感じで、わあってなるように、10メートルも逃げた。

T ここから、子ぎつねのどういう気持ちが分かりますか。

・慌ててる。

・にげなきやにげなきや、隠れなきや隠れなきやって感じて、

・目に涙たまってるんじゃないの。

T (13〜15) その正体は何だったんですか。

・何もいませんでした。

・「それはもみのくのでした」って書いてあるから、もみの枝に雪がいつぱい積もっていたから、それが、落ちた。

T 【場面をつなげて読む】さつきこういう風になつていた子ぎつねの気持ちはどうなりましたか。

・私は、怖かった気持ちがあつて、誰もいないことが分かって安心した。

・ほっとした。

・前は雪で遊んでただけで、今度は、雪が危険な物に変化したから、

・さつき、目に何か刺さったと思って最初はおびえて、お母さんに、何も刺さっていないよって言われてほっとして、夢中で遊んでいたんだけどびっくりして、何もいなかっただけ、またほっとした。

・さつき、目に何か刺さったと思って最初はおびえて、お母さんに、何も刺さっていないよって言われてほっとして、夢中で遊んでいたんだけどびっくりして、Y君と同じで、自分で振り返ってみたら、

何もいなくて、なあんだ、もみの枝から雪が落ちたんだと自分で分かったから、ただ雪が落ちてきただけじゃんと思ってほっとした。

T そして、子ぎつねが見た物は何ですか。

・枝から雪がなだれ落ちたのを見ました。

・子ぎつねは、白いきぬ糸のように雪がこぼれているのを見ました。

T (実物) 光っているんです。何を受けて。

・太陽

T 子ぎつねはどんなことを見たり、学んだりしていますか。

・遊んだ、いろんな事をして、たまには、怖くなったり、逃げたり、雪って楽しい物だと思ったり、怖い物だと思ったり、

・雪って、いろんな事があるんだな。

・怖いこともあつたけど、雪って、楽しくって不思議な物だ。

・楽しい。

・雪遊びの中で、いろんな事を経験して、雪って、まぶしいことも、楽しいことも怖いことも、きれいなこともある。

T なんともまとめる。

・不思議な雪

T さつき、楽しいことや怖いことや、きれいなことを経験した、誰。

・子ぎつね。(書く)

### 3. 2人の会話・子ぎつねの自慢と

#### 母さんぎつねの迷い

手袋を買って自慢している子ぎつねと、子ぎつねの経験によって、自分の価値観が揺らぐ母さん

ぎつねをイメージする。

「母ちゃん、人間ってちつともこわくないや。」

「どうして?」

「ほう、まちがえて本当のおてて出しちゃったの。でもぼうし屋さん、つかまえなかったもの。ちゃんとこないあたたかい手ぶくろくくれたもの。」

「⑦⑧」と言つて、手ぶくろのはまつた両手をパンパ

⑦⑧「やってみせました。⑨⑩母さんぎつねは、

⑪「まあ!」

とあきれましたが、  
「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」

とつぶやきました。

T 昨日の復習です。2匹のきつねがの所で分かったことを発表して下さい。

K: 私は、子ぎつねは手袋を買いに行つて成長したと思います。わけは、親子で書いてるけど、手袋を買った後は、2匹のきつねって書いてあるから、子ぎつねは、手袋を買った間に成長したと思います。

J: ほくは、前は、子ぎつねは何も知らなくて、ちよつぱり甘えん坊だったけど、お母さんに頼まれて、子ぎつねが1人で町まで行つて、1人でちゃんと手袋を買って、少し大人に近づいたから、2匹のきつねって書いてあると思います。

T この中を2匹のきつねは帰って行きました。そのとき、子ぎつねがこう言っているよね。「かあちゃん」って言ってますね。こは、子ぎつねのどんな

気持ちが出ていますか。

L:怖くない。

M:ちつとも怖くないやって言うのは、すんごく怖くなつて言うこと。

N:逆に優しく。全く。

O:ぼくもHと似てて、ちつともって書いてあるから、普通の怖くないより、全く、全然怖くない。

T:どうして子ぎつねは全く怖くないって思ったんですか。

K:間違えて、手袋を買うときに本当の手を出したけど、こんなにいい温かい手袋を買えたから。

P:本当の手を出してしまったのに、きつねの手を出してしまったのに、何もしないで、こんないい手袋買えたから、お母さんに、何もなかったよって、言いたかったんだと思います。

・ 本当の子ぎつねの手を出しちゃったけど、でも、手袋を売ってくれたし、捕まえやしなかったから、それをお母さんに言いたかった。

T:でもって書いてるね。何と何が反対なの。

G:間違えて本当のおててを出しちゃったら、本当はつかまるけど、でも、帽子屋さんは捕まえなかった。

Q:間違えて本当の手を出しちゃったら、捕まえて檻の中に入れちゃうんだけど、帽子屋さんは、捕まえやしなかった。

R:きつねの手を出しちゃったら、お母さんが言ったとおり、捕まえるけど、帽子屋さんは、ちゃんとこんな温かい手袋を売ってくれた。

T:間違えて本当のおててを出しちゃったと言うことは、つまりこれは、どういう意味かということ、つかまる。

T:と言うことを意味しているんだよね。でも、捕ま

えやしなかった。これが反対になっているんだね。

そして、どんな手袋をくれたと、母さんぎつねに教えていますか。

・ 子ぎつねは、ちゃんと、こんな温かい手袋をくれたものとおかあさんぎつねに言っています。

T:そうだね。ただの手袋って言っていないね。

・ 強調してる。

T:何を強調してるの。

・ 手袋。

T:手袋がどういう物だつて。

S:温かい、

・ 雪を触ったときに手を守ってくれる

T:本には何て書いていますか。

・ こんないい温かい手袋

・ こういう手袋を買えたつて、教えてるんだよ。

T:【書かれていることを絵と感情にする】「手袋のばんばん」これは、子ぎつねのどういう気持ちが表示

ていますか。やってご覧、この言葉と、行動は。

T:うれしそう感じがする

J:自分で手袋買えたから、買えたよ、みたいな感じで、こういう温かいいい手袋もらつたつていうのをお母さんに見せたかった。

L:ぼくもみんなと同じで、ばんばんつてやって、アピールしてる。

・ 自分で買った手袋だから、ばんばんつてやって、はしゃいでいる。

ていつてんじゃないの。

T:そういう気持ちがこで出ているんだね。(読み)

T:それを聞いていた母さんぎつねはどうしていますか。長いので切つて考えましょう。『それを聞いてまあとあきれましたが、』

・ 先生、まあ下びつくりマークがあるから、普通にびつくりしたんでなく、すごくあきれ

T:呆れるつて、どういう意味。

・ 思いがけないことが起きた。

・ 思いがけないことや、程度のひどいことが起きる。

・ 私はみんなと違って、すつかり驚いている

T:目はどうなった。

・ 大つきくなった。

T:思いがけない事つて何ですか。母さんぎつねにとつて、すごく驚いた事つて何ですか。

・ 子ぎつねも、子どもだけで買物で来たこと。

・ 【場面をつなげて考える】Z:お母さんは、何回も、聞いていなかったから、何回も、言つたりしてただけで、人間の手の方を差し入れてつて言つたのに、自分の子ぎつねの手を出したから、お母さんはびつくりした。

A:よくそんなこと出来たね。

V:前の33番で、ゆつくり、きつねの手を出しちゃうけないよつて言つて、お母さんぎつねが町に行つて、さんぎ追いまくられたのに、きつねの手を出したけど、何で捕まえられなかったんだらう

T:2つびつくりしたこと。きつねの手を出しちゃうたこと。そして、それでも手袋を買えたこと。

K:先生、母さんぎつねはさ、人間の手でき、しつかり、言つたとおりに買えたと思つたけど、きつねの手だから、びつくりした。

W:なんで。なんできつねの手で買えたのつて、びつ

くりしてんじゃないの。

・V：先生、呆れましたがの所にかが付いている。」

T 自分はつかまったのにつかまらない、買えてしまった。ところが、Vは、その後「が」が付いているって言うの。お母さんぎつねは何て言っているでしょう。

・「ほんとに……」

K：先生、本当に人間はいいかしらって、坊やを信じればいいのに……。

T 【書かれていることを絵と感情にする】 つぶやくってどういう意味ですか。

・X：小さな声で独り言のようにいったと思います。

T 言ってご覧、誰が言ったの。

・母さんぎつね。

T どういうことなんだろう。

・れお、「本当に〜」は、母さんぎつねの悩み。

T 何を悩んでいるの。

G：子ぎつねを信じていいのか、自分のあったことを信じていいのか。

C：本当は人間は怖い物って思っていたんだけど、子ぎつねの言葉を聞いて、本当に人間はいい物かと悩んだ。

・【子ども同士をつないだ学習集団を作る・場面をつなげて考える】U：GとCの話の聞いて思ったんだけど、母さんぎつねはあのおとき、どうして私と友達が、追いかけられたんだらうとか。母さんぎつねは、追いかけられたとき人間で怖い物だと思った。子ぎつねに怖くないよって言われたから、悩んだ。

V：どうして私達が行ったときはそうだったのかなって悩んだ。

D：つぶやきましたって事はぶつぶつ言っただから、ええって、子ぎつねはお母さんの言っただけで人間

はちっとも怖くないやって思ってるけど、お母さんは人間で怖いという体験をしてみましたから、そう思い込んでしまつて、子どもが怖くないって言ったから、本当にそうなのかなって、分かんなくなつて悩んで、ぶつぶつ言つた。

T なぜ悩んだの。その原因は、

・子ぎつねに教えられた。

T 子ぎつねの経験ね。人間は、子ぎつねはどういう物だつて思つたの。

・優しい。

T 優しいという言葉を使つていたっけ。

・こわかないや。

・【書かれていることを絵と感情にする】K：「本当に……」って2回しか教科書には書いていないけど、母さんぎつねは、本に書ききれないほど、悩んでいた。

T こっちは、1人で買って自慢している子ぎつね。こっちは、

・悩んでいる母さんぎつね。

#### 4 おわりに

3月、「手袋を買いに」は3年生最後の読み取りの作品となった。子ども達は、様々な作品で今まで培ってきた読みの力を土台にし、更に今回は、3つの視点を意識して行つたため、子ども達は読む力を高めることが出来たのではないかと思う。

視点1「書かれていることを絵と感情にする」では、書かれていることを絵としてイメージすることによって、感情を読み取ることができた。反面、この作品は、情景描写がとても美しい作品だが、子ぎつねが初めての雪で遊ぶ場面は、教材解釈の

間違いや浅さがあったり、教師のイメージが乏しかったりして、絵にすることは難しい場面もあった。前半の雪で遊ぶ場面や絹糸の場面は、イメージが乏しかった。

視点2「場面をつなげて考える」では、幼い子ぎつねが1人で手袋を買うことを通して成長している。前の子ぎつねと比較して考えることで、読みを深めることができた。

視点3「子ども同士をつないだ学習集団を作る」では、これまでに培つた読む力を土台に、個人の読み取つたことを出し合つた。友達のを聞くことで、1人では気付かなかつたことに気付いたり、考えが深まつたりした。更に、深まつた考えを出し合うことで、学級がお互いを高め合い、考え合う学習集団になつていったように思う。

一人一人の抱えている問題が多くあつた子ども達だったが、学習の中で自分を表現し、友達や担任に認められるということが、学校に来る大きな喜びになつていた。

(古川第四小学校)

(日教組第63次教育研究全国集会レポートより)

紙面の関係で一部略す)

# 平和をもとめるぼくのねがい



昭和28年(1953年)3月、宮城県教職員組合が県内の小中学生から表題の作文を募集し28編をまとめて小さい本を編集しました。前年に日米安保条約が発効、警察予備隊が保安隊に改組されました。この年は、朝鮮休戦協定の調印、池田・ロバートソン会談開始。翌年は第五福竜丸被曝、自衛隊法が公布されました。戦後8年目で、なんとも心配なことが次々とつづいたのです。

本のまえがきは、「さあ、この間の戦争でひどい目にあった私たちは、世界の人々にむかって、戦争はやめましょう、みんな仲良くしましょう、と呼びかけ、平和のためにお互いが努力し合おうではありませんか。」と結んでいます。その中から3人の作文と先生の文を紹介します。60年前の声をもう一度読んで、9条とともにこの子どもたちの「ねがい」を引き継いでいきたいものです、今生きている者の責任として。(かずが)

## ぼくのおとうさん

本吉郡鹿折小学校 白山分校 一年 熊谷 健治

ぼくには、おともだちのように おとうさんが いないのです。ぼくの おとうさんは  
せんそうで なくなりました。ぼくが まだ うまれないときです。ぼくが おかあさんへ  
「ごいへ おとうさんが いったの」とききました。おかあさんは「せんそうに いった た  
まに あたつて しんだのです」と おつしやいました。

ぼくは そのとき ほんとうに せんそうは いやだと おもいました。

せんそうが なかつたら おとうさんから ごほんや おもちゃを かってもらうことが  
できます。それから おとうさんと いっしょに きしやに のつて けせんぬまにも い  
くことが できます。

母と子 菅原 竹子

(「ぼくのおとうさん」を指導)

毎朝のように一番先に校門をくぐり、  
元気に「おはようございます」と礼儀正  
しく挨拶して、ブランコやシーソーに元  
気一杯にとびのる健治さんは小麦色の如  
何にも健康そうな明朗な子供でどうして  
も父親がないとは思われない。

手を引かれて入学をして、どうにか文  
も作れるようになったある日「平和」に  
ついて子供たちと話し合い、作文させて

おかあさんは まいにち まちへ 行って、はたらいて います。そして ぼくに いろいろなもの を かってくださいます。けれども ぼくは、おとうさんと おかあさんと ぼくと たのしく くらしたいと おもいます。

## 引きあげ

遠田郡涌谷第一小学校 四年 金 森 敬 子

「明日は内地へ帰れるから、早くおきるのですよ」と言うおかあさんの声にうれしくて飛びおきた。私たちはリックをせおったり、できるだけ多くの荷物を持つてのうじょうの前へ集まりました。班を決められ、班のじゅんじょに出発しました。

駅へきてしばらくまたされましたが、みんなの顔は内地へ帰れるというのでうれしそうでした。やっと汽車に乗れたのは夕方でした。汽車にはまだガラスが、ぜんぜんなく、入口の戸もありませんでした。

それから私たちがおこされたのは、ま夜中でした。ここからは線路がこわれて歩かなければなりません。汽車をおりて、まっくらな道を夜明けまで歩かされて、ついた所はぼうせき工場でした。そこでみんな持つてきたなべを出して、ごはんをたいたり、おにぎりを作ったりしました。おかあさんは妹のおしめをあらってほしていたら、間もなく「出発」といわれてあわてて荷物をまとめました。

私と兄さんは元気よく歩いたけれども、四つだった弟は長いこと歩くのができなくて、妹をおぶっているおかあさんにだかれて歩いたり、同じ班のおじさんにおぶさったりしました。そして行れつからおくれないように、一生けんめい歩きました。

みた。それを今度応募したのである。  
作文そのものは何の形容もなく、ただどどしくはあるが、その中に、父親のな  
い寂寥の思いがにじんでいるのに私は目  
頭のあつくなってくるのを覚えた。

健治さんのお母さんは教育に熱心で厳  
しい程躰に心をくばっている。また若い  
美しい人である。

私はこの母親から、この子供から、そ  
の父親をうばっていった戦争をにくまず  
には居られない。

健治さんよ、お母さんと共に、強く、  
明るく、すこやかでありますように。

心の奥底から

伊藤 秀夫

（「引きあげ」を指導）

子供は生長の過程に於いて、好戦的  
な傾向をもっている。しかし又反面平和  
愛好心をも持つているものである。互に  
相反するこの二面を持つている子供の心  
的傾向を、如何なる方向に生長せしめる  
か、如何なる人間形成こそもつとも望ま  
しい方向であるかは論をまたずも明瞭で  
あるはずである。ところが、近時の日本  
教育の方向は望ましいはずの姿から離れ  
て、逆コース的な傾向をもつて進展して  
いることは、見逃すことの出来ない事実



と中、学校に休んだり、高い山にのぼったり、満人のぶらくを通ったり、足がぼうになるほど歩かされました。この行れつからおくれると、ひぞくにおそわれるというので、あかりをつけないうで、まっくらな山道を通ったこともありました。沼のようなところをわたった時は、一ばん気持ち悪く思いました。どろくさい足をあらう所がないので、道ばたの草でぬぐって行れつからおくれないように歩きました。

と中「休め」と言われた時には、道ばただろうが、どこだろうがかまわず、死んだ人のようになつてねてしまいました。

明け方になつて、寒くて目をさますと、大人の人たちは、せんろのまくら木をはずしてきて、たき火をしていました。なんだかくさいにおいがあるので聞きますと、行れつの中で死んだ子どもや、年よりを火そうにしているのだと聞かされました。と中で、持ち物が重いので着物やお米をすてていく人もありました。もったいないと思つても、だれもひろう人がありません。通りかかった人や満人などが喜んで拾つていったこともありました。

やつとの思いで奉天の駅についた時、これからも歩かなくてもよいと聞いたのでうれしくなりました。奉天からは、こんどはむがいに車で運ばれましたが、石炭かすがとんでだれの顔もみんなまつ黒です。便所がないのは一ばんこまりました。

コ口島についてからはいろいろなちゅうしゃを、毎日のようにされました。ここでは共同すいじなので、持ってきたお米はとり上げられ、こうりゃんのおかゆだけを一日に二回一週間ほど食べさせられました。それも分りようが少いので、いつもおながすいてたまりませんでした。おかあさんは、行れつを作つて、すいとうに入れるおゆをかつたり、私たちのためにやきいもをかつてきたりして下さいました。が、行れつを作つていて買えないときには、がつかりしました。

となつている。その一例を述べれば、終戦後あのような感激と興奮をもって誰もが口にし、自らその創造者をもって任じていた平和の問題も、近時に於いては口をつぐんで語るをやめ、平和を叫ぶ者を赤のレッテルにて抹殺せんとする傾向のあることは、その証拠であると思う。

しかし、日本が近代戦の最大武器である原爆の洗札にて得た平和、幾多の尊い罪なき民衆の血をもって得た平和、自分の教え子を戦場に送った教師の回心から生れた平和、このようにして得た平和をどうしてわれわれは離してしまうことが出来ようか。教師が教え子を守り、日本教育を守り、更に前進せしめるためには、どうしても教師自身がピースメーカーにならなければならぬ。そして教え子たちは後継い者となってピースメーカーにならなければならないと思う。

教師よ静かに耳をかたむけよ。子供たちは心の奥底から戦争の惨禍をつづつて大人への抗議を叫んでいるではないか。子供たちが身をもって体験し、その体験の底から切々と綴る生活の記録と平和への希いを語っているではないか。広島原爆の子の叫び、いや原爆の子だけではない。われわれのすぐ目の前にも叫びを上げている子供のことばを聞け。雄雄しく叫んで立った子供たちに、大人への抗議を勇ましく語ってくれた教え子に、私は深く御礼を言いたい。そして子供たちに私は服罪したい。

ふねへ乗つてからは、かんぱんや米のおかゆをたべさせられたのでうれしくなりました。こうして一月ばかりかかつてやっと浦谷の駅についた時には、弟は白目（白内障）をだして歩けなくなっていました。妹もほねと皮ばかりになって、みんなに「たすかるかしら」といわれるほどでした。

おじいさんの家に来てから、かつおのさしみを食べさせられてからやっと元気になりました。

せんそうはもうほんとにいやです。あのやさしかったおとうさんも、八口軍のためにつれていかれてしまいました。おとうさんだけでも、生きていたら早く帰つて来てくれたらと思います。

もうどんなことがあつても、せんそうはしないで下さい。

ああいう苦しい思いは二どとしたくはありません。いつまでも平和であるようにいのります。

## 右 足

本吉郡浦島小学校 六年 畠 山 巖

今日も又雪雲の上をにぶい音をたてて飛行機が飛んで行く。僕は、このぼく音をきくたびに、昭和二十年八月九日の空しゅうの事を思いだし、背中から水をかけられたようにひゃつとします。あの空しゅうの時のことは、僕が死ぬまで忘れることは出来ません。

僕は、片わ者です。あの空しゅうで右の足をもぎとられてしまったのです。あの時の痛さといったら、今考えて見ただけでもぞつとするほどです。もちろん僕だけがこんなになつた

だから私はどんなことを言われようと平和を叫ぶのだ。敬子さんたちと共に、互に手をとりあつて平和に生き、平和をつくる人間になることをここにたくお誓いする。

巖君と戦争

畠 山 義 一

（「右足」を指導）

私が巖君を受持ったのは、巖君が五年生になつてからで、縁があつて六年を卒業するまで一緒でした。

私は巖君が二年生になつた四月からこ

のではありません。

家のおばあさんは、胸から背中までばくだんのはへんがとおつてあぶなく死にましたが、運よく生きることができました。ぎしきにいたおじさんは背中にはへんがあたつて「くやしい、くやしい。」と言つて死んでいきました。

又別家のおばさんは、四つになる喜恵子をだいたまま二人いっしょにばくだんがあたつて死にました。

律子は顔にはへんがあたつて血ぐるみになり、となり村の松岩の年とつたおじさんも、足がもげて死んでしまつてそこは全く血の海のようにでした。

僕は、その日から二十日めにととうひざから下をとらなければならなくなつたので、家中の人が見ているところで足をもぎとりました。

それからずっと六年間、右足をなくした片わ者の僕は、雨の日も風の日も、みんなにまけまいと一生けんめいになつて、この急な学校の坂を、毎日登つてきて、勉強をしています。

ふつう教室での勉強の時考えませんが、運動好きの僕は、体育の時間や、運動会の際には、本とうにあの時の空しゆうが思いだされ、くやしくなつてきます。

遠足では、去年五年の時と今年は、親切な受持先生のおかげさまで、ずっとはなれた室根山までつれられて行つてきました。足のない僕がみんなといっしょに遠足ができたのですもの、僕のうれしきは言葉で言いきれないほどでした。

あの戦争さえなかったならば、僕など今頃はみんなといっしょに雪がっせんだの、馬のりなどをして思いきつて遊んでいたことでしょう。

僕は、二日前に、習字の展らん会で入賞したので入賞者の代表として、賞状をいただいた時、びつこであるためにほんとうにはずかしく思いました。四月からは中学校に入るので。家

の浦島小学校に勤務しておりますが、巖君のいたましい姿を見、それが戦争の犠牲であつたことを知つた時は、全くかわいそうでなりません。巖君が負傷した頃は私は仙台に学徒動員になっていて、仙台の空襲を眼のあたり見せつけられました。郷里がこの様に可愛想な犠牲者を出しているとは思つて見られません。終戦になつて帰つて見るとどうでしょう。私は巖君の受持ちになれたことをどんなにか嬉しく思つたかしれません。片足のない巖君は、風雨もいとわずに不自由ながら殆んど休むことなく通学しておつたのですが、学校以外の学習には殆んど皆と一緒にいけないのでした。私はこの不幸な児童の片足になつてやろうと決心したのでした。

今になつても忘れられないことは、受持つて日の浅い五月のはじめでした。もう春の遠足の相談をしている時でした。Mという児童が立つて、皆、巖君は今までどこにも行つたことがないから、今度の遠足には、おれたちがおぶつていこうじゃないか、というのでした。皆拍手でした。この時の私の喜びといつたらたえようもありませんでした。巖君の眼にも光つたものがありました。

この日の感激が六年を終えるまで学級全員の心に刻まれ、巖君は幸福に生活出来たのです。こうして六ヶ年殆んど休まずに通学したのです。巖君は本当に意志の強い、しかも図工の技能の持ち主です。

からは、通われないので、中学校の近くのいとこの家に、三年間も泊っていないかなければならぬのです。みんなが毎日家の人たちと生活するのに、なんで、僕だけが、いとこに泊っていないかならぬのでしよう。こんなことを考えると、僕は泣きたくなってしまいます。

これも、みんな戦争のためです。本当に戦争はいやです。

先だつて気仙沼町の郵便局の新築祝賀の展らん会を見るために、先生の白転車にのせられて行ったのですが、その時街角で、白衣の兵隊さんたちが四人でハモ二力とギターをひきながら一人の兵隊さんがそれに合わせてうたい、寒い冬空にお金をもらっている姿を見ましたが、その兵隊さんたちは、どなたも手がなかったり、足がなかったりしたかわいそうな人たちばかりなのでした。あの兵隊さんたちもやっぱりあのつめたい戦争のためにきずついたのです。

日本中には戦争のために親とわかれたり、片わになったりしている人たちのほか、新聞やラジオで知ったんですがまだソ連や、その他の国から帰って来ない人たちもたくさんいるそうです。これらは、みんな戦争のためです。

ああ、僕はその飛行機の音を聞くたびに……。どうして世界の国々の人は戦争をするのでしょうか。戦争こそ決して、とくはしません。おたがいにこまることばかりです。

僕は世界中から一日も早く戦争がなくなるように、いつでも祈っているのです。戦争さえなければ、僕のような片わ者は出ないのですから。

巖君も言ってますように、戦争はいやなことです。日本の児童たちに再び戦争の憂き目にあわせたくありません。

平和を求める作文に巖君がのせられることになり心から嬉しく思いますと共に、再び戦争の起こらない平和な国家を求めてやまない次第であります。

# アキラとケン

## —巨視的にみる—

門 真 隆

私はかつて一度、担任をはずされ、担任をおりた。結果的には担任どうしの相談のうえ一人の子を何週間か他の組へうつしたというだけのことになったが、実質的にはやはり私は担任をおりたのだ。今もってつらい思い出だが、そのなかでみたケンという子の資質と、今その奥にみえてきたものについてかいてみたい。

### 一、アキラのこと

私は当時、五年のアキラをどうすることもできなくなっていた。学年主任は見えていられなくなったのか「アキラを私の組にいれてみようか」といった。形は試みと相談だったが、状況からはそれしかないという思いがうかがわれ、たった一人の子をどうにもできないという屈辱はたえがたかったが、万策つきたように思っていた私はうなずくしかなかった。

アキラはうけもってから毎日のようにもめごとをおこした。遊びでは子どもたちどうしの中

にあるルールを無視し、相手を従わせるためには言いがかりをつけ、それでだめなときにはおどした。それがこどもらしからぬ迫力をもっていたのは、そのころ塀のなかにいるといわれていた兄二人の影響でもあつたらうか。子どもたちはアキラを遊びにいれてもいれなくてもアキラともめごとにもまきこまれ、それがみな私のところにもちこまれた。

無法はクラスの中だけにとどまっていなかった。保健室からそのころ希望者に頒布していた肝油をとつてにげ、店屋からは万引をし工事現場からは工事用銅線を盗んだ。

当時はカネヘン景気とかいって金属類はみな高価で、マンホールのふたもなくなるといふころだったが、彼はアカといわれて鉄よりも高く売れるらしかった銅線に目をつけたが、売りにいった先ですぐにつかまった。万引は何回か成功したらしいが、彼の考えた手口は誰かをつれていって釣り銭のあるように買物をさせ、店の

人が勘定に気をとられているあいだにとるというものだった。

そのころはまだ持っている人の多くなかったトランジスタラジオをおどしとつたこともある。買ってもらったうれしさに学校に持ってきたばかりのところをとられて父兄も怒った。こんなことがとぎれることなくつづき、そのたびに対応におわれた。

休むことはなかったが授業からはよく逃げた。ある家庭科の時間にもいなくなつて——当時専科だったが——校内をさがしてもいず、家についてみた。うす暗い家の中をのぞいても外まわりをみてもいる気配はなく、家に帰つたのではなかったかと帰りがけてふとふりむいて、ぱつたりとアキラと目が合った。アキラは低いトタ屋根の上へべつたりとふせてこつちをうかがっていた。聞けばその日使う裁縫の布がなかったからだという。あわてて大丈夫だといつてつれて帰りはしたが、こつちの目配りのたりないことは明らかだった。

今になってみれば私のアキラへの対し方いろいろの問題があつたことがわかるが、そのころは「泥棒」「万引」「恐喝」という言葉で表現されるいわゆる「非行」の現象に目をうばわれ、そのなかにひそんでいるアキラの内面にはほとんど目を注ぐ余裕がなく、よろめくようにしてクラス替えに同意し、アキラの担任をおりたのだった。

## 二、ケンにおける「アキラ」

クラス替えの話を出すとき、すでに主任の学級ではいろいろと話し合いをもっていたらしく、一生けんめい対応してくれた。給食を多めにやりたり、学用品をそろえてやりたり、わからないところを教える係をつけたりしたらしい。そんな主任の話を私は複雑な思いで聞いていた。うまくやれなかった無念さの一方、それに類することはやってみていないわけではなく、子どもたちの好意に感じて自分の衝動を抑制するアキラではないように思えたから。日がたつにつれ次第に主任のクラスの状態がかつての私のクラスとにきた。アキラは初めの遠慮がなくなるという以前とおなじような無法をやりはじめ、善意をもつて接しようとした子を落胆させていったように、それらがつきつきとうちの子の耳にはいつてきた。

ちようどその頃ケンが言ったのだった。

「先生、アッキもどつてこらせつべ」

アッキとはアキラのことである。隣の組の「迷惑」もあつたが、アキラから逃げたという思いにさいなまれていた私は、ケンの言葉ですぐその心をきめた。主任は心配しながらも同意してくれたが、私に成算はなく精一杯やろうという思いしかなかったがケンはどうだったのだろうか。私にはそう言い出したケンの心のうちを考える余裕などまっただくなかった。

一人だけ他の組にやられたことはさすがのアキラにもいくらかはこたえたのだろう。もどるかときくにつこり笑つた。そんなアキラの様子をみて主任と私は、もとの組にもどる約束だといつて私の手帳につきのようなことを書かせて、拇印まで押させた。

もうひとのものをとつたりしません

もうひとをいじめたりしません

〇〇〇〇アキラ

〇〇〇〇せんせい

もんませんせい

アキラは何の意味もわからずに朱肉で赤くした親指をいわれるままに名前の下におしつけた。今思うと、やっと平和な状態をたのしめるようになっていた子どもたちとの関係をふたたび悪化させないための、アキラの側の最低だがしかし絶対必要な条件だと考えたのだが、ばかかなことをしたものだと思つ。

それに対して子どもたちの方は賢明だった。私よりはるかによくアキラをしていて、私の書かせた約束など信じなかった。そして気は強く言葉は荒いが腕力はそれほどでもないアキラに無法をさせないための方法をさぐっていた。そして、アキラの席はケンの隣にきめた。

ケンはあとで児童会長の選挙があつた時、のり気でないのに候補者にまつりあげられてしまったが、その選挙運動につかう自分のポスターを自分でかいていたような子であつた。会議で

すこしおそくなつて教室に行つてみると、応援するからといつていた子どもたちがそれぞれに理由があつたのだろうが、みな帰つてしまつてだれもいなくなつた教室で淡々とポスターの仕上げをしていた。

私を見てもべつに訴えるでもなかつた。かえつてわたしの方が腹をたてかげんになつた。学級委員をしていたヒロシはケンを最も大事な一人にしていたし、狷介なカズオもケンには心を聞いていた。気づいて見ればアキラもケンには無法をすることはなかつたようだ。

そういうケンを子どもたちはすでにつかんでいたのかもしれない。また、前アキラを受け持つて世話をしつつかれきつてしまつたまじめでやさしいヒロシの経験をふまえていたのかもしれない。アキラはケンに託された。

そのケンはアキラに四六時中対応しようとはしなかつた。私が腹をたてそうな時にもケンは興奮しなかつた。アキラもいごちがよいらしくあいかわらず小さいもめごとはあつたが前のような大きな不満にまではいたらなかつた。アキラへの対しかたにはケンなりの基準があるらしかつたが、私にはよくわからなかつた。ケンがなぜアキラをもどつてこらせようと言ひ出したのか、なぜアキラを引き受けたのか、そしてアキラにどう対応しどんなアキラにしようとしたのかわからないが見事にやつたとしかいいようがない。少なくともアキラに関するかぎりク

ラスはケンを中心に動いていた。私の頭から教師の「器」ということばははなれなくなった。

### 三、アキラからの二つの電話

そんな私にあらためてこのことを象徴するような出来事があった。

アキラもまわりの子との関係もその後そう大きい変化がなくみんな卒業していったが、アキラは矯正施設にはいったということを耳にした。

ある夜、思いがけない電話があった。

「先生か、おれ、おれ、アキラ。おれ脱走してきた」というアキラの声だった。瞬間まず、会って話を聞かなければと思いい、「どこからかけてる？ 今行くから」といったが、アキラは「これからケンと会うから」と、場所もいわず電話は切れた。

すぐケンに電話すると、すでにアキラから電話がきていて出かけるところだった。どんな話が二人の間であったのか、アキラは施設にもどつたとケンは言ってきた。

脱走したアキラは、まずケンに電話をかける気になったのだ。「もうしません」という証文を書かせた教師ではなく、自分をやりわりと受けとめてくれたケンを支えにしたのだ。私はアキラに見限られたように思え、またケンがうらやましかった。

ケンはなぜそのようなケンになり得たのか  
だれもがケンのようになり得るのか  
なれそうもない私はどうすればいいのか

このまま教師をやつていつていいのか  
また「教師の器」「人間の器」という言葉が  
えなくなつた。

それからさらに十年ばかりたつ。アキラから例の「先生か、おれ、おれ、アキラ」という電話がかかつてきた。今長町の方の電気工事店ではたらいにいるという。結婚して子どももいるということのほか、何人かの配下がいるということも語つた。

脱走以後のアキラを知らず、また、ふりまわされるだけでアキラにたいして何の見通しも手だてもとれなかつた私は、十年後のこういう姿をきいてはただおどろくだけだった。そして必然的にケンのことが頭にうかんだ。

ケンにはあのころのアキラにこういうところまで見えていたとは考えにくい、アキラへの対応をみてはそう考えるしかないように思えた。

### 四、今思うこと

今はそれからさらに二十年たっている。担任の私がどうしようもなくなつたアキラへの対し方のなかでみたケンのすがたをかくつもりでペンをとつた。だが、書いていくうちに思いもかけなかつた気持ちがあわてきた。アキラの姿がいじらしくなつてきたのである。そして、それと同時になんであんなにアキラの行為になやんだんだらうと思議になつた。

小遣いもろくにもらえぬアキラがどうして腹

をふさげばよかつたか。肝油をとり、キヤラメルを万引きし、カネヘンを拾つて金をうるしかなかつたではないか。屋根にべつたりとふせて私をうかがつていたアキラ、うすぐらい家のなかでわかりもしない放送に聞き入つていたアキラ、カンニングまでして答えをかこうとしていた姿はいじらしいとしか言いようがない。まして兄二人が塀の中の人というような環境だったのだ。

「ちょうどそのころ読んでいた本の中でつぎのような言葉にぶつかつた。

微視的に見るとき、ものは必ずしも美しいものではない。しかし、巨視的にみる心の大きさを失わず、微視的にみるものに及ぼせ。

（森敦「天へ送る手紙」）

このあと文脈から言葉をひろつと

そうすると美しいものが見えてくる  
となる。

私はまさに微視的にばかりアキラを見ていたのだと思う。巨視的に見ようとする心、それが教師の子どもへの「愛」ではないか。そして、「器」を問題にするなら、それが「人間の器」「教師の器」なのかもしれない。ケンはそれができた子どもなのだった。

（「カマラード」12号—1992年9月発行より転載）

## 北方綴方の道程

—ちいさな鈴木道太論—

菊地 新

「小説・鈴木道太」——もし、私に文才があれば、そんな小説を書いてみたいとしみじみ思う。ことほど鈴木道太という人間は私にとって心ひかれる存在である。

母ひとり子ひとりの貧しい少年期、すぐれた素質をあらわしてくる学生時代、青年教師として村の貧困や因襲に立ち向うヒロイックな姿やがて生活綴方の旗手としての活躍、更には権力の重圧に挫折し鉄窓に呻吟する受難の運命、そして解放された戦後、著書がベストセラーとなり教育評論家或いは社会教育運動者として活躍多忙な後半生——波瀾に富む彼の人生のどの部分を切り取ってもそれは小説的ではないか。

### 卓抜した稟質

私はしばしば鈴木道太のすぐれた稟質に瞠目する。

運動能力は抜群で、学生時代は名スプリンター

として聞こえた。北日本中等学校の記録のいくつかを書き換え、走巾跳六メートル二十六の彼の記録も宮城師範ではしばらくの間、破る者も出なかった。また、神宮大会ではかのオリンピックの名選手、暁の超特急の吉岡隆徳とともにグランドに立つたともいう。

しかし、後年、教育人として見せた彼の傑出した才質はスポーツのそれ以上である。

彼の鋭敏な洞察力や卓抜した発想にはしばしば舌をまく。よく言われる話術のうまさ・文章のうまさも決して単なるテクニクの問題ではない。現象への鋭い洞察、人間への深い理解、そして微密な思考があつてのこと。人の心をつかむ見事さも、むしろ彼のヒューマニズムに人々が吸引されていく現象であり、いわば彼の人間の魅力の所産である。要するにそれらすべては彼の卓れた才質と人間的内容を物語るものだ。私は思っている。

### 本質をなすヒューマニズム

私はよく平間さんと喋々談笑している姿を見ることが多かったが、平間初男、鈴木道太というこの親友同士は妙に対照的なところがあつた。

平間さんは堂々たる体躯、剛腹にみえてデリケート、万事憶病なほど細心な努力家。道太さんは小柄色白、一見女性的に見えるながら率直明快、言動が直線的な天才肌。共通しているのは共に涙もろい人情家、いわば温かい思いやりの心の深さであろうか。

二人の本質をなすこのヒューマニズムは同じ時代を生きた人間の共通した性格なのだろうか、それともやっぱり独自の個性なのだろうか。私はいつも考えさせられたことだった。

### 生育史が作った自由の性格

私は鈴木道太を一種の天才だと思っている。天才にありがちな独断や直情も彼の特徴としてあげていいかも知れない。私自身、その直情に途迷いさせられた体験を幾度か持っている。しかし、事情がわかれば豁然としていささかのわかかりも残さないのがまた彼の特性である。私は、その子どものように思無邪な人柄にしみじみ感じいったことだった。

それは、彼の育ちのよさから作られた性格だと私は思っている。



彼はよく貧しい生い立ちを必要以上に言う。母ひとり子ひとり、たしかに貧しく寂しく孤独だったに違いない。しかし、時代の事情から察すれば、ひとりつ子ゆえに彼は人並以上のびやかに自由に少年期を成長してきたのではないだろうか。

貧しい生い立ちは、不屈の意志や強い正義感を育んだが、同時に、母の愛情ひとり占めの自由で鷹揚な生育の歴史は、人に愛される純粹直情の性格を作り、計算のない言動や理想へ直進する生き方をも育てたのではあるまいか。

天才、鈴木道太に比すべくもないが、私自身の生い立ちに相似の部分が多いので、殊更に私はそのことを思うのである。

所詮、人間はその生育の歴史の影響から逃れることはできない。鈴木道太についても、すぐれた稟質は別としても、その自由な思考、闊達な言動、人々から愛される性格のかなりの部分が、その生育の歴史によつて作られているとは思っている。

### 鈴木道太のペーソス

人々はしばしば鈴木道太の諧謔を言い、そのユーモアを語る。即妙のウィットやセンスあるユーモアは確かに類を見ない。昆虫のような勘の鋭さであり、頭の切れ味のよさである。

ひとを笑わせることを特技とする鈴木道太は、稀に露悪に走り過ぎることもある。が、しかし、

私はそんな、ミステーク？を含めてすら、彼の諧謔を単純に諧謔のみとは受けとれない。むしろ、諧謔や自虐の背後にある彼の孤独感、寂寥感、ペーソスといったものがいたく胸に沁みてくるのである。

彼は根っからのリベラリストである。しかも彼の中に根強く存在して動かぬものはヒューマニズムである。

従つてひと一倍社会正義感も強い。しかし、彼は知っている。因襲の根強さを、権力の酷薄さを、そして容易には動かし難い現実を。

誰よりも、人間の無力さ、人間の哀しさを知っている彼は、どうしようもない現実や人間に對した時、無邪気に正義感や道徳論を露出するようなことはしない。そんな時、彼の哀しみや絶望感は、しばしば自虐や諧謔の形をとつてあらわれると、私は見ている。つまり、カリカチャライズ（戯画化）された彼の姿は、彼の逆接的表現であり、居直りですらある。

戯画化された諧謔の姿の奥にある彼のペーソスを理解せずして鈴木道太を真に理解したとはいえない。

その悲劇性にこそ鈴木道太の本質があるのだと私は思っている。このことは彼の傑出した人間を語るとき忘れてはならないことである。

\*

生活綴方という教育方法論は既に評価も定着し、広く世界から尊敬の眼をもつて注目されて

きている。

その先駆者のひとり、鈴木道太という人間とその仕事は教育の歴史に必ず残るだろうし、残さなければならぬと私は信じている。しかし、鈴木道太を生活綴方運動の華やかな旗手として単純に偶像化するのはつしみたい。教育実践者としての彼の苦悩と受難の過程を詳しく理解してこそ、彼の教育の生命が今日の教育に甦り継承されるのだと思つている。

彼の人間を語り仕事をするにはその著作によるのが一番いいのだが、何しろ彼の著作は膨大である。限られたページでその全貌を語ることはできない。

ここでは特に、彼の呼称した「北方性」と「生活学校（村落学校）」への思想形成へ注目して若干の資料を提示し、鈴木道太研究への端緒としたい。

以下、鈴木文について若干説明しておく。

創作「農村教師の日記」  
随想「お背戸の雀」

創作「農村教師の日記」（一九三〇）と随想「お背戸の雀」（一九三二）は、ともに母校（宮城師範）の「右尚会雑誌」に会友として寄稿したもの。若い日の彼を知る貴重な資料である。

彼は病気のため同級生よりほぼ一年遅れて、一九二八年三月一五日、仙台から八キロ程の七

郷村荒浜小学校な赴任した。

「農村教師の日記」は、創作の形をとっているが実話に近く、教師となって二年、母校の後輩に意気込んだ実践を語ろうとしているもの。「お背戸の雀」ともども、文学的誇張や青年らしい衝動がちらつくが、既に彼のすぐれた才質や後年の志向の萌芽が見えることに注目したい。なおつけ加えて言えば、文中の多少左翼的なもの言いは、新感覚派とともにプロレタリア文学が隆盛な当時のインテリや文学青年に見られるひとつの流行的現象でもあった。

\*

この前後から生活綴方へ進んでいく彼の歩みをたどってみると次のようなことがあった。

一九二九(昭和四年)鈴木三重吉との邂逅。「国語土曜会」結成。

雑誌「赤い鳥」の再刊を計画中の三重吉が鈴木道太の手紙を機縁に来仙。この高名の作家との出会いに彼は感激。これを機会として彼は国語教育に熱心な友人同志と「国語土曜会」を結成する。

一九三一(昭和六年)千葉春雄「教育・国語教育」(東京)創刊。

一九三二(昭和七年)菊池 讓「国語教育研究」創刊。(仙台、季刊)

右の両誌は若い彼の活躍舞台になったものの、特に、菊池讓の「国語教育研究」は地元研究誌でもあり、佐々木正・菅野門之助・横沢文質・

五十嵐勝治らとともに集団参加し、やがてはその中心的存在となつていった。

なお、初めは主として教壇技術的な研究をこの誌上に継続発表しているのは、主宰菊池讓のそもそもの創刊意志に応えたものであろう。

しかし、国語教育研究の風潮は、当時次第に綴方教育へ傾斜していき、それも「赤い鳥」の童心主義から生活主義へと移りつつあった。主宰の菊池讓も、やがては生活現実にあつべき「村の読方教育」を提唱し、鈴木道太もはつきりとリアリズム教育を言うに至る。そうした生活主義への移行は先というのではない、相互一体、集団の自らなる研究の推移であり、時代の文学思潮の反映でもあった。しかし、鈴木道太がその主張や実践の先駆者であり推進力であったことは疑いない。

#### 「綴方・生活教室の実践的設営」

#### 「綴り方に於ける北方性の問題」

「綴方・生活教室の実践的設営」(一九三五)は昭和十年七月号の「国語教育研究」所載。後者は「綴方生活」(小砂丘忠義編集)第七巻第三号に掲載されたもの。

なお、これと前後して「世代に於ける綴方精神―綴方教育に於ける目的観の再認識―」(「工程」(創刊号)(百田宗治編集・一九三五)外の論説もあるが、右はそれらを代表するものとしてこ

こに掲げた。

これらによれば、この頃は既に生活綴方による彼の信条が不動のものとなり、これを如何に実践深化すべきかを苦悩している状況がよく察知できる。

「綴り方に於ける北方性の問題」(一九三五)は特に当時論議を呼び著名になつた立言である。論議の焦点は、「北方性」とは単なる地方性を言うに過ぎないのではないかという点にあつたが、ここには彼の立言の根拠がかなり明確にでている。

#### 創作「村落学校」

創作「村落学校」(一九三七)は「宮城教育」(昭和十二年八月、教育芸芸号)に萩原霧太郎のペンネームで掲載したもの。文芸作品とはいえず、例によつて彼自身の教育事実を下地に創作に仕立てあげたものであることは間違いない。

本篇自体が「前篇」となっており、「後篇」に何を書かんとしたかを想察することは、彼の「村落学校」を語る場合、重要な意味をもつてくる。「農村教師の日記」、「綴方・生活教室の実践的設営」、「綴り方に於ける北方性の問題」と見えてきて、この「村落学校」にいたれば、鈴木道太の実践の形成過程がはつきりとわかるようである。特に、「村落学校」(生活学校)こそは彼の夢であり、彼の志向の到達点であつたことがわ

かる。

文学青年、鈴木道太は、教師出発の当初から国語教育に心惹かれ、特に鈴木三重吉との因縁から「赤い鳥」の童心主義に傾倒していた時期があった。しかし、当時、貧困と災害にうちめされた東北農村の生活と子どもの実態に接してからは、芸術至上的な綴方教育にもあきたらず、生活の現実と取り組ませる綴方教育の実践をめざすようになる。(当時の教科書絶対の画一教育の中に、なまの生活を直接学習素材にできるのは国語科の中の「綴方」だけだった。) いわゆる生活綴方の誕生であり、リアリズム教育の実践である。そして、その熱心な思索と探究は、やがて「北方性」の主張となっていく。

そして、最初の赴任校荒浜小における教育体験や青年運動の指導体験は、最終的には「生活学校」という、広くコミュニティを含む教育構想に結実していった、と見ていいのではないだろうか。

もとより、生活を凝視させ、生活を綴らせることによって、生活する意志を作り、生活を深め生活を前進させようという、いわゆる生活綴方に寄せる信仰に変わりはない。しかし、それも単なる教科教育的活動にとどめず、地域の現実に即した学校全体の組織的しかも生産的活動を底辺にせねば、人間育成の効果なしという考えが生活学校の発想とみていいだろう。

当時既に、野村芳兵衛(児童の村)の雑誌「生

活学校」があった。生活綴方は、この「生活学校」の戸塚廉や教育科学研究会の留岡清男からきびしい批判をうけている。

しかし、鈴木道太は率直に教科研の城戸幡太郎や留岡清男に学び、あるいは戸塚廉を呼んで「生活学校の会」を広瀬小学校で開催している事実もある。既に彼の胸に「生活学校」が存在していたからに外ならない。

彼は左翼文献も読み、また、ソヴィエトのピオニールに学ぶところがあったようである。しかし、彼の「生活学校」は、それらの模倣ではなかった。学校を生命ある共同体社会と見る点については同じでも、鈴木道太のそれはあくまで生活綴方をカリキュラムの中核に見据え、地域の生活実情や生産活動を深く凝視し、地域の青年会・母の会・部落会等を学校の子ども自治会ともども教育構想の中に組み入れた、いわば、生活綴方をコアするコミュニティスクールともいべき生活主義教育の構想であった。

それは荒浜小学校における集団主義教育をノスタルジアとして入間田小学校に於ける「生活学校」実践ではほぼ完全な形をとるにいったつといていい。

しかし、彼の「生活学校」は僅か一年にして挫折し、彼は「生活綴方」への回帰を宣言するにいたる。

生活綴方を全教育活動へと念じ、学級、学校、部落を一元的に把握し連帯させた生活教育をと

いう彼の切実な夢が破れたのはなぜなのか。

それは彼の理想が学校の統一理想として確立し難かったことに原因のひとつがあった。同僚教師に期待通りの理解や協力が得られなかったことを彼は後日回想している。しかし、推察するに、この事を含めてむしろ時代の状況が彼の理想の実現を阻んだとみるのが至当ではあるまいか。

貧窮の農村には、「自力更生」のスローガンが打ち立てられ、やがて軍国主義は無暴な戦争へ盲進していく、こうした時代の推移はその折々学校にも強い協力を強制し、学校には労力奉仕をはじめとする複雑な仕事が次第に量を増して正常な教育を語るいとまもなくなってきたのである。

なお、敢えて推し量れば、当時、彼は左翼思想の持ち主と疑われているという忠告もあった。人一倍デリケートな彼に検束の予感に揺れる心情がなかったとはいえない。これを予防する擬態の必要をも感じていたかも知れない。

この前後の彼の実践姿勢が多少不透明である、後に多少批判する向きも出るのだが、私はむしろ、時に揺れ時に迷う姿にこそ人間鈴木道太の体温を強く感ずるのである。

当時、彼は三十才になるやならず、そんな若さでこうした生活主義教育を構想した彼に、私はむしろ彼の卓抜した見識や思索の深さを思い、その傑出した資質と業績に改めて感嘆せず

にはおれないのである。

「生きている雑草」

「生きている雑草」は後年書かれた回想であるが、当時の時代背景とともに彼の思想と東北の青年教師群の連帯や活動の様子がよくうかがわれるので抄録した。

敢えて言えば、鈴木道太の人間や仕事の偉大さだけに眼をとられて、彼を単純にわれわれと異質の人間としてはならない。

若くして理想に燃え、時にわれとヒロイズムに酔い、時に悩み、時に意識過剰になり、時に挫折し、時に身を屈しても生きねばならぬ鈴木道太の、その折々の姿は、ある時ある場合の私たち自身の姿ではないか。

そうした彼の姿を自分たちの人生とオーバーラップさせるところからこそ、鈴木道太のほんとうの理解が生まれるといつていいだろう。

彼も悩み多き教師だったという認識、しかし彼は理想への情熱の火を消すことがなかったという認識、そこから彼の業績への理解を出発させねば、彼から学ぶところも、彼の命をかけたものが今日の教育に生かされることも少ないだろうと私は思っている。

それにしても、若くしてなんという傑出した見識かと私はその先見性に瞠目驚嘆する。彼は時代の受難者としてより、むしろ、その先見性

においてこそ記憶されなければならない。

彼の誕生は少し早すぎた、あるいは少し遅すぎたといつてもいい。もし彼のビジョンを、大正ロマンチズムの時代に、あるいは戦後民主教育が大きく羽ばたこうとしている時代に実現せしめたならばと、私はしばしば天を仰いで嘆息

するのである。

「風の中の旗手たち」(1981年発行すばる教育双書3)は「鈴木道太・平間初男・佐々木正・菅野門之助」4人の書いたもの的一部を取り上げて構成されているが、その中の「鈴木道太」に付けた鈴木道太論である。

妹よ

菅原京子

ある夜 わたしは  
ふとんの中で泣いている妹を見た。  
きつと母を思い出しているんだなあ……。  
去年 今年と  
出かせぎに行つた母。  
今まで一度も離れたことがなかったのに――。  
「かあちゃん。」  
「なんだ京子、睦子。」  
その答えは今はない。  
ただ冷たいふとんがある。  
あの笑顔を思い出すと  
やりきれない。  
妹よ 泣くな  
春になれば会えるのに――。

\*「教育文化」第45号(1966年4月)より転載

(山形・中学1年)